

【実践研究】

幼保小連携から考える「運動遊び」の 教授内容・方法に関する研究

——保育現場・教育現場を対象とした実態調査から——

中村 泰介*・金川 朋子**

キーワード：運動あそび ソーシャル／スキル 幼児体育

1. 研究目的

幼児期における運動遊びの意義は大きく、保育・教育現場での運動遊びの推進が望まれている。本研究では、保育現場及び教育現場において、「運動あそび」の教授内容・方法や教授する際の工夫等を調査し分析を行い、「運動あそび」を展開するうえでの保育実践力の育成を目指した教授内容を検討することを目的とする。

2. 研究方法

幼稚園、保育園、認定こども園に在籍する保育者及び幼稚園教諭を対象に、自身の運動やスポーツに関する意識調査と、幼児の「運動遊び」に関する実施の有無、時間、内容、園に有する遊具等についてのアンケート調査及びインタビュー調査を実施した。調査は2022年10月～2023年2月の期間に実施した。

3. 研究結果及び考察—保育現場における運動遊びの現状

(1) 保育者の状況について

回答数80(19%)、回答者の性別は、女性72人(90%)、男性8人(10%)であった。回答者の属性は図表1に示す。

*大阪大谷大学

**四條畷学園短期大学

所属	継続年数		職位		
保育所	9	3年未満	10	園長・副園長	14
幼稚園	23	4～9年	16	主任	8
認定こども園	48	10～19年	24	1歳児未満クラス	2
		20年以上	30	1～2歳児クラス	7
		3歳児クラス	10		
		4歳児クラス	15		
		5歳児クラス	12		
		加配保育者	2		
		フリー保育者	6		
			1～3歳児クラス	4	

図表1 回答者の属性

回答者については、保育所9人、幼稚園23人(26.7%)、認定こども園48人(60%)であった。保育歴については、20年以上30人、10～19年24人、4～9年16人、3年未10人であった。現在の園での職種については、園長・副園長14人、主任8人、1歳未満

児クラス担任2人、1～2歳児クラス担任7人、3歳児クラス担任10人、4歳児クラス担任15人、5歳児クラス担任12人、加配保育者2人、フリー保育者6人、1～3歳児クラス担当4人であった。保有している資格・免許の取得施設、方法については、4年生大学22人(27.5%)、短期大学(2年生、3年生)53人(66.2%)、専門学校5人(6.3%)、通信制1人(1.3%)、保育士試験4人(5%)、その他2(2.5%)であり、半数以上が短期大学での取得であった(図表2参照)。

保有している資格・免許については、保育士資格79人(98.8%)、幼稚園教員免許78人(97.5%)、小学校教員免許14人(17.5%)、幼児体育指導員資格4人(5%)、リトミック資格1人(1.3%)、社会福祉主事任用資格1人(1.3%)、養護学校教諭免許1人(1.3%)、音楽療育士1人(1.3%)であった(図表3参照)。

回答者自身の1週間の運動時間では、30分～1時間30人(37.5%)、1～2時間15人(18.8%)、2～3時間4人(5%)、3～4時間2人(2.5%)、5時間以上1人(1.2%)、全くしない28人(35%)であった。

回答者自身の運動経験については、現在取り組んでいる運動・スポーツがある7人(8.8%)、大学時代に取り組んでいた運動・スポーツがある7人(8.8%)、高校・中学校時代に取り組んでいた運動・スポーツがある44人(55%)、小学校時代に取り組んでいた運動・スポーツがある7人(8.8%)、幼児期に取り組んでいた運動・スポーツがある4人(5%)、ほとんど運動・スポーツ経験がない11人(13.7%)であった。

上記で回答した運動実践の時期に行っていた種目については、球技42人(52.5%)、体操4人(5%)、水泳8人(10%)、武道3人(3.8%)、ダンス4人(5%)、陸上3人(3.8%)であった。

回答者自身の運動・スポーツに対する好感度(現在)については、とても好き17人

(21.3%)、好き 34 人 (42.5%)、
 どちらともいえない 22 人
 (27.5%)、嫌い 7 人 (8.8%) で
 あった。

子どもと一緒に運動・スポー
 ツをすることへの好感度につ
 いては、とても好き 24 人 (30
 人%)、好き 46 人 (57.5%)、ど
 ちらともいえない 9 人 (11.3%)、
 嫌い 1 人 (1.2%) であった。

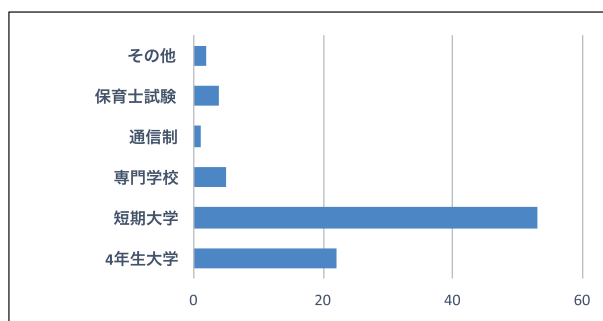
スポーツ庁の 2015 年度体力・
 運動能力調査結果の概要及び報
 告書¹⁾によれば、運動・スポー
 ツの実施状況の過去との比較の
 中では、特に女子の運動実施に
 関しては高校期で大幅に下落し
 て 18 歳で底 (最も少ない) に
 なり、20 代後半から上昇傾向に

転じるという。今回の本調査のデータはスポーツ庁の女性の運動離れのタイミングの時期とも概ね類似する傾向にあるといえる。特に高校卒業から大学或いは短期大学に在籍する女性の運動習慣の改善は、養成校だけでなく社会の課題として取り組むべきである。

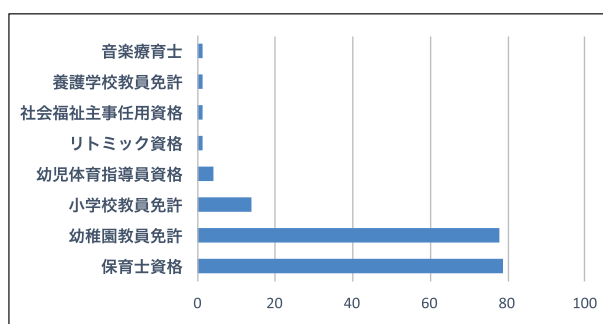
(2) 運動遊びの実施状況

保育現場・教育現場で「運動遊び」にどのように取り組んでいるかについては、日々の保育活動・教育活動として取り組む 60 人 (75.1%)、設定保育活動として取り組む 45 人 (56.3%)、外部委託を活用した設定保育・教育活動として取り組む 28 人 (35.1%)、その他 1 人 (1.3%) であった。

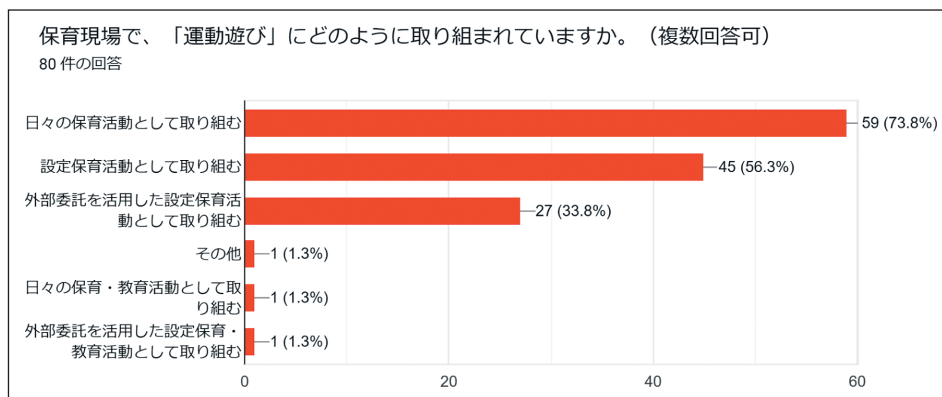
現在勤務する保育現場での外部委託による「運動遊び」の実施状況については、マット運動等を中心に外部委託している 31 人 (38.8%)、サッカー等の球技運動を中心に外部委託している 4 人 (5%)、リズム運動遊び等を中心に外部委託している 3 人 (3.7%)、水泳指導等を中心に外部委託している 3 人 (3.7%)、サーキット遊び等を中心に外部委託している 1 人 (1.2%)、体育遊び 1 人 (1.2%)、様々な運動遊びを取り入れた実技などがあつた。(外部委託していない 27 人 (33.8%))



図表 2 資格・免許の取得施設



図表 3 保有する資格・免許



図表 4 保育現場での「運動遊び」の実施状況

上記の回答の中で、外部委託の「運動遊び」の計画、実践については、計画も含め外部講師が全てを行う 29 人、計画時のみ外部講師と共同で行い、運動指導は外部委託講師が行う 9 人、計画も含め、外部委託講師と共同で運動指導を行う 12 人であった。

以上からも、外部委託による「運動遊び」の種目は、マット運動が多い傾向であり、また運動指導の計画から指導まで外部委託講師が担っている園も多く見受けられた。また、専門の体育指導員（保健体育免許状取得者）を雇用し、その職員が園のほとんどの運動指導を担っているケースもあった。

(3) 運動遊び実施（使用遊具別保有状況と実施状況）

保有している使用遊具状況と実施状況については、保有率及び活用頻度が高い遊具から、マット 76 人、縄跳び 73 人、フープ 71 人、跳び箱 65 人、大縄 62 人、平均台 61 人、パラバルーン 59 人、玉入れ 56 人、大型ボール 37 人、巧技台 43 人、竹馬 37 人、ロープ 35 人、スカーフ 18 人、一輪車 6 人、綱引き 23 人であった。以上のことから、養成校の実技科目では上記の遊具を用いた遊びの展開やバリエーションを広げる内容で構成されることが望ましいといえる。一方では、地域にある自然を生かしたさまざまな遊びを展開している園もあった。園を取り巻く環境の特色や在園する家庭の状況などを考慮した運動遊びや活動の実施が重要であるといえる。

(4) アイスブレイクについて

保育の運動遊び場面においてアイスブレイクで取り組んでいる内容としては図表 5 で示している回答があった。0・1・2 歳児の小規模保育園では、できることに限りがあるが、その中で実施できる内容のものや、その他の回答では昔ながらの伝承遊びや、模倣を土台にした遊び、

また数を認知しながら仲間と協同する猛獣狩りに行こうよ、体操やリズムダンスなど、さまざまなアイスブレイクが展開されていた。蛭原の伝承遊びの技能習得に関する研究報告では（蛭原，2021）、保育者養成の学生がお手玉やけん玉といった技能習得が難しいとされる主観的困難度が高い課題への取り組みは、保育者効力感を高める可能性があるとして報告されている。従って、保育現場で働く保育者にとっても、主観的困難度が高い課題への取り組みは、そのスキル獲得だけではなく、保育者としての自信を確立するうえでも効果があると考えられる。

伝承遊び

はないちもんめ・だるまさんがころんだ・わらべうた
とっくいぐあ（沖縄のわらべうた）・リズム運動（あそび）、体操等
兄弟すずめ・ペンギン体操・五色の玉
ゲーム等のあそび
ナンバーコール、犯人は誰だ、貨物列車、オオカミさん今何時、バスに乗って！模倣あそび
猛獣狩りに行こうよ、指示されたものにタッチして戻るゲーム、タコイカゲーム、新聞紙遊び

図表 5 保育現場でのアイスブレイクの実施内容

(5) スポーツテストについて

スポーツテストの実施の有無については、実施している 12 人（15%）、以前実施していたが、今は実施していない 5 人（6.3%）、実施していない 63 人（78.8%）であった。

以上の回答からも、スポーツテストを実施していない園が極めて多い傾向にあり、そのことは測定を通じた子どもの体力だけでなく身体の発育段階等を把握する機会の減少にもつながるものと考えられる。

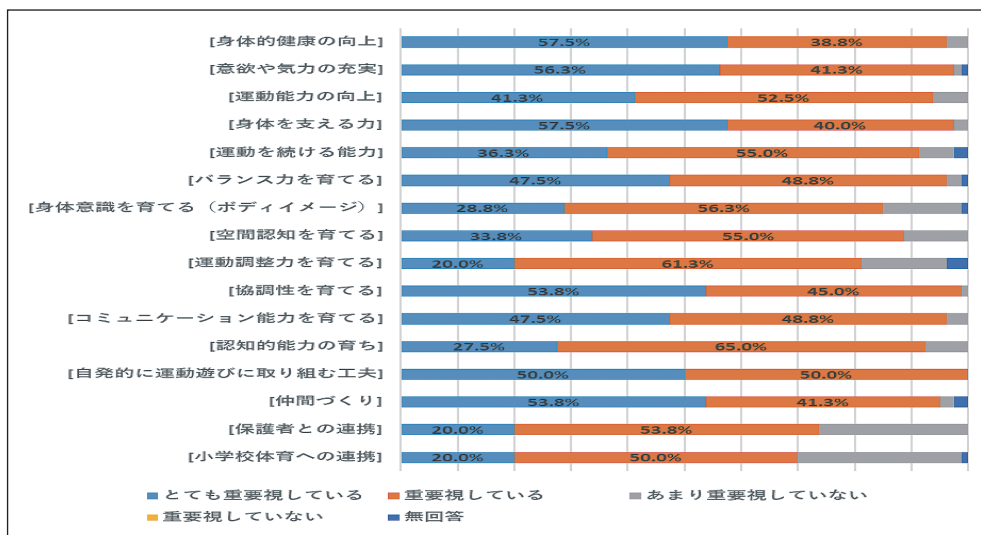
幼児期のスポーツテストの測定項目は、25m 走、立ち幅跳び、両足連続とび越し、体支持持続時間、捕球（『幼児体育（専門）』，2009）がある。幼児の体力テストは単に運動の優劣を評価するものではなく、体の機能の発達が健全であるかを把握する指標として用いることが望ましい（三村ら，2018）。

しかし、上記のような測定だけではなく簡易に実践できる測定もあり、保育現場で楽しみながら体力を向上できる、とくに調整力（バランス、柔軟性、巧緻性、協応性、敏捷性）を育み、把握できるような測定項目が望ましいと考える。

4. 研究結果及び考察—運動遊びについてのねらいと問題点等

(1) 運動遊びを通し育てたい力や連携等について

運動遊びを通し育てたい力や連携等について、「身体的健康の向上」を含む 16 項目について、4 件法で回答を得た（図表 6）。「自発的に運動に取り組む工夫」については、全回答者が、「とても重視している」と「重視している」と回答した結果であった。保育者が運動を通して

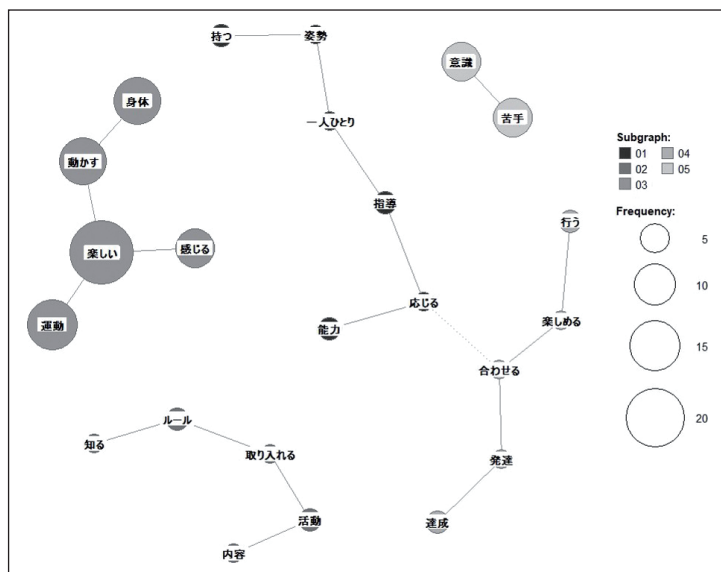


図表 6 運動遊びを通し育てたい力や連携等について

育てたい力や連携について意識と比較すると、「保護者との連携」、「小学校体育への連携」は、低い結果が得られた。

(2) 実技指導で大切にしていること

実技指導で大切にしていることについて、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 309、異なり語数 130 語、出現回数平均 2.38 回、出現回数の 1 標準偏差 3.42 回であった。語の出現回数の分布については、出現回数 4 で約 90%であった。抽出された上位 10 位の語については、図表 8 に示す。また、共起ネットワーク分析を行った (図表 7)。結果、5 群に分かれた。01 群:「楽しい・運動・感じる・動かす・身体」の 5 語であった。以下同様に、02 群:「苦手・意識」、03 群:「指導・応じる・一人ひとり・姿勢・持つ」、04 群:「合わせる・発達・楽しめる・能力他」、05 群:「取り入れる・活動・ルール他」であり、共起の強さを示す係数はいずれも係数 0.2 以上であった。出現回数の多い群から順に、出現した語について、それぞれの語が出現した文脈に照らして考察した。01 群は、「楽しく体を動かす」、「身体を動かす楽しさ」、「体を動かす楽しさや心地よさを感じること」、02 群は、「動が嫌いにならないよう取り組む」、「運動が苦手な子どもも楽しく取り組めるよう活動内容」、「苦手意識をもたずに取り組めるよう、ハードルをあげないこと」、03 群は、「身体能力には個人差があるので、その子に応じて指導している」、「指導者の話を聞く」、「一人ひとりに合った指導」、04 群は、「年齢や発達に応じた題材を怪我なく楽しめるように行う運動に合わせた準備運動」、「子どもの姿に合わせて」、「子ども達が達成感を得ることができるようにすること」、05 群は、



図表7 共起ネットワーク（実技指導での大切にしていること）

順位	抽出語	出現回数
1	楽しい	24
2	運動	15
3	楽しむ	15
4	身体	13
5	動かす	13
6	子ども	12
7	意識	9
8	感じる	9
9	苦手	9
10	取り組める	9

図表8 抽出語（大切にしていること）

「ルールを知らせる」、「簡単なルールを取り入れた活動」、「遊びを取り入れて楽しみながら活動」の回答から、保育者が運動遊びで大切にしている内容が示された。

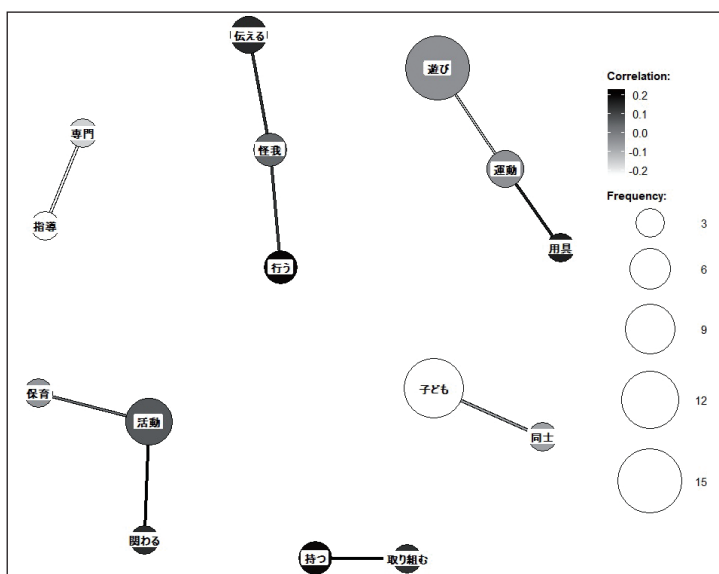
(3) 実技指導で工夫していること

実技指導で工夫していることについて、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 321、異なり語数 178 語、出現回数平均 1.80 回、出現回数の 1 標準偏差 1.73 回であった。語の出現回数の分布については、出現回数 3 回で約 90%であった。抽出された上位 10 位の語については、図表 10 に示す。また、共起ネットワーク分析を行った（図表 9）。結果、6 群に分かれた。01 群：「遊び・運動・用具」の 3 語であった。以下同様に、02 群：「子ども・同士」、03 群：「活動・保育・関わる」、04 群：「怪我・行う・伝える」、05 群：「指導・専門」06 群：「取り組む・持つ」であり、共起の強さを示す係数はいずれも係数 0.2 以上であった。出現回数の多い群から順に、出現した語について、それぞれの語が出現した文脈に照らして考察した。01 群は、「遊び遊びの中で、運動を取り入れ、「体育指導」となるより、遊びの中で自然と育ってほしい力が身につくように工夫している」、「日常の遊びの中で『できた』『やりたい』運動遊びを増やしていく」、「子どもの自発的な遊び展開」、02 群は、「子どもたちが楽しむことを念頭」、「子どもたちで考えて行えるような言葉掛け」、「子ども同士が関わる事」、「子ども同士のコミュニケーション」、03 群は、「集団活動であれば、子ども同士の関わりも増えるようにする」、「段階を踏んで活動を進めていく」、「保育者と子どもが一緒に楽

しめる活動を重視する」、04群は、「怪我をしないように見守りながら」、「怪我のないように配置や準備体操を行いながらしている」、「ルールをしっかりと皆が理解できるように伝え」、05群は、「専門の講師な指導してもらっている」、「遊びの中で、運動を取り入れる」、「『体育指導』となるより、遊びの中で自然と育ってほしい力が身につくように工夫している」、06群は、「子どもが意欲を持ってのぞめるような魅力的な取り組み」「楽しむ中でもそういう意識を持って遊べるように工夫している」といった保育者が工夫している内容が示された。

(4) 実技指導で苦慮していること

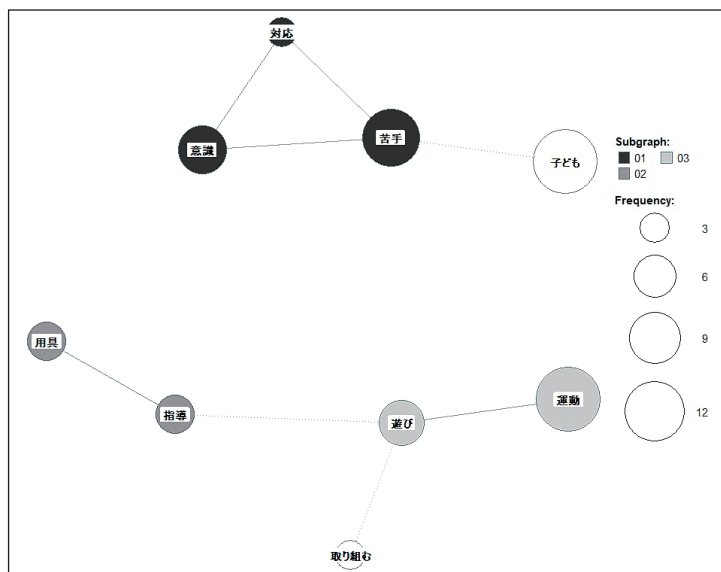
実技指導で苦慮していることについて、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 236、異なり語数 135 語、出現回数平均 1.75 回、出現回数の 1 標準偏差 2.02 回であった。語の出現回数の分布については、出現回数 3 回で約 90% であった。抽出された上位 10 位の語については、図表 12 に示す。また、共起ネットワーク分析を行った（図表 11）。結果、3 群に分かれた。01 群：「苦手・意識・対応・子ども」の 4 語であった。以下同様に、02 群：「運動・遊び」、03 群：「用具・指導」であり、共起の強さを示す係数はいずれも係数 0.2 以上であった。出現回数の多い群から順に、出現した語について、それぞれの語が出現した文脈に照らして考察した。01 群は、「苦手な子どもに対しての取り組み」、「得意な子と苦手な子の差がある」「運動遊びをする場所や時間の調整を意識周りの存在を意識する」、02 群は、「園内にホールがなく、室内での運動遊びをする際に十分な場所と道具がない」、「運動量



図表 9 共起ネットワーク（実技指導での工夫）

順位	抽出語	出現回数
1	遊び	15
2	子ども	13
3	活動	8
4	楽しむ	6
5	ルール	5
6	運動	5
7	楽しい	5
8	楽しめる	5
9	伝える	5
10	怪我	4

図表 10 抽出語（実技指導での工夫）



図表 11 共起ネットワーク（実技指導で苦慮していること）

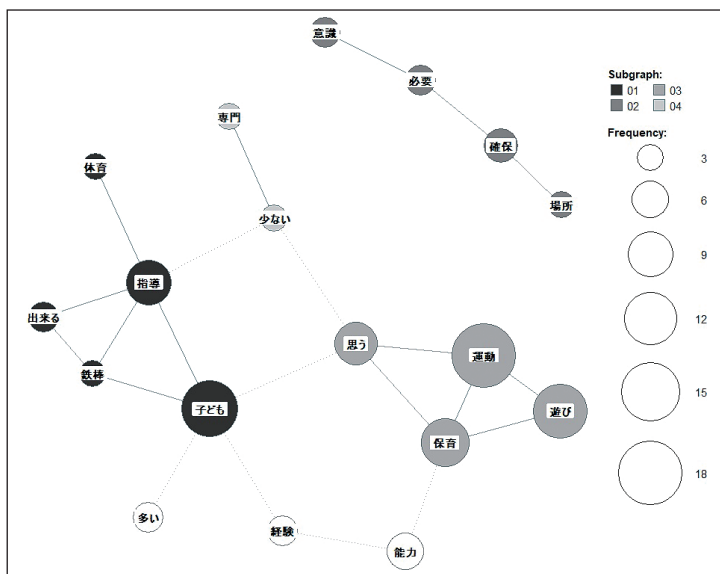
順位	抽出語	出現回数
1	運動	14
2	子ども	14
3	苦手	11
4	意識	8
5	遊び	7
6	指導	5
7	用具	5
8	確保	4
9	経験	4
10	取り組む	3

図表 12 抽出語（実技指導で苦慮していること）

低下の懸念」、「保護者の思いと子どもの運動能力の差」、0.3 群は、「用具正しい指導方法職員の運動遊びへの指導力がわからない」、「職員の運動遊びへの指導力が課題」、「発達に適した指導ができていないか、不安になる時がある」、「側転や跳び箱等の指導の仕方にとっても悩んだ」といった、保育者が実技指導で苦慮されている内容が得られた。

(5) 保育現場での「運動遊び」の活動において問題とされていること

保育現場での「運動遊び」の活動において問題とされているについて、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 489、異なり語数 221、回数平均 2.04 回数の 1 標準偏差 2.38 であった。出現回数の分布については、出現回数 3 回で約 90% であった。抽出された上位 10 位の語については、図表 14 に示す。また、共起ネットワーク分析を行った（図表 13）。01 群：「運動・保育・遊び・思う」、02 群：「子ども・指導・体育・出来る・鉄棒」、03 群：「確保・必要・場所・意識」、4 群：「少ない・専門」であり、共起の強さを示す係数はいずれも係数 0.2 以上であった。出現回数の多い群から順に、出現した語について、それぞれの語が出現した文脈に照らして考察した。01 群では、「体操の時間だけが運動の育ちの時間ではなく普段の遊びの時間の中で運動に繋がる様に意識して取り入れていくことが大事である。」「子どもたちの運動能力の低下が目立つが、保育者の運動経験の有無も問題だと思う。「小規模保育園は園庭がないことが多いため、戸外での運動遊びが散歩中心になっている」、02 群では「子どもの能力の違いに合わせる体育指導」、「支援を要するお子さんや運動に興味があっ



図表 13 共起ネットワーク（保育現場における問題点）

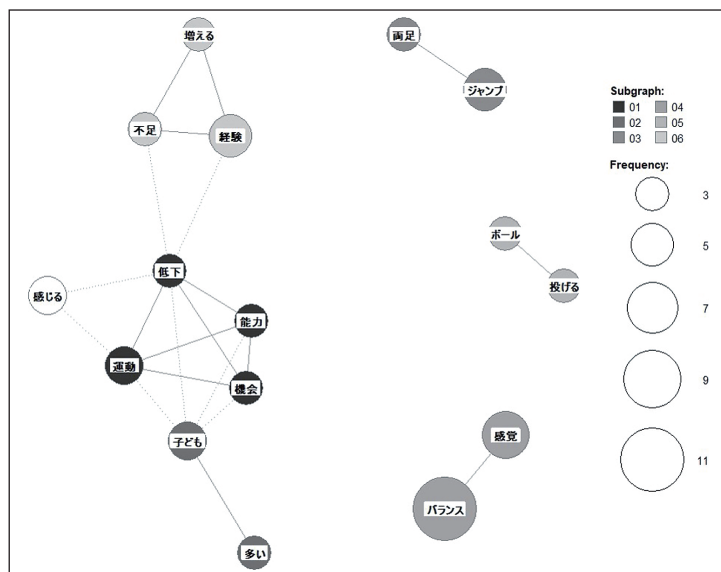
順位	抽出語	出現回数
1	運動	18
2	子ども	14
3	遊び	13
4	保育	10
5	指導	9
6	思う	8
7	怪我	8
8	能力	7
9	確保	7
10	意識	6

図表 14 抽出語（保育現場における問題点）

たり、苦手な子どもさんなどがなども目立たない楽しみ方が課題」、「跳び箱や鉄棒の出来ない子どもへの指導」、「子どもの能力の違いに合わせる体育指導」、「能力の個人差が大きい」、04群：「専門知識のある人が少ない」、05群：「場所やスペースの確保」、「保育者の指導力」、「場所の確保や人数の十分な確保」、「保育者自身の身体能力や遊び経験の不足」といった保育現場における問題点が示された。

(6) 子どもに不足していると考える動きや内容

保育現場での子どもに不足していると考える動きや内容について、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 230 なり語数 143、回数平均 1.61 回数、1 標準偏差 1.28 であった。出現回数の分布については、出現回数 3 回で約 90% であった。抽出された上位 10 位の語については、図表 16 に示す。また、共起ネットワーク分析を行った（図表 15）。結果、6 群に分かれた。01 群：「バランス・感覚」の 2 語であった。以下同様に、02 群：「ジャンプ・両足」、03 群：「経験・不足・増える」、04 群：「運動・能力・機会・低下」、05 群：「ボール・投げる」06 群：「子ども・多い」であり、共起の強さを示す係数はいずれも係数 0.2 以上であった。出現回数の多い群から順に、出現した語について、それぞれの語が出現した文脈に照らして考察した。まず、01 群は、「バランス経験不足が増えている」、「バランスや経験できる機会、簡単にクリアしながら自信をつけ意欲を促せるような環境も必要」「バランス感覚、体の使い方」、02 群は、「両足でのジャンプ」、「両足を揃えてのジャンプしてから両足で



図表 15 共起ネットワーク (子どもに不足する動き)

順位	抽出語	出現回数
1	バランス	11
2	感覚	6
3	ジャンプ	5
4	経験	5
5	運動	4
6	感じる	4
7	使い方	4
8	使う	4
9	子ども	4
10	弱い	4

図表 16 抽出語 (子どもに不足する動き)

の着地」、「ジャンプやスキップが苦手な子どもが多くなっている」、03 群は、「経験が不足していること」、「ジャングルジム等に対する恐怖感を持つ子が増えている」、「バランスが悪く姿勢を保つのが難しい子が増えたと感じる」、04 群は、「危険察知能力が低い」、「全体的に体力が低下したと感じる」、「体を動かす運動だけでなく、製作にも指先を使うので、必要だと感じた」、05 群は、「上半身の筋力・投げたり受けたりの動作」、「ボールを投げる」「ジャンプ力やボールを投げる力等」、06 群は、「体幹 (の力：筆者追記) がない子どもが多い」、「手や腕を使うこと (咄嗟のときに、手が出ない子どもが多い)」「ジャンプやスキップが苦手な子どもが多くなっている」といった回答されており、子どもに不足する運動、動き、内容が推察される。

(7) 「小学校体育への連携」を意識して取り組まれている

「小学校体育への連携」について、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、得られた抽出語 403 異なり語数 208、回数平均 1.94 回数、1 標準偏差 2.44 であった。出現回数の分布については、出現回数 4 回で約 90% であった。出現回数上位 5 位の語については、鉄棒 (12)、縄跳び (12)、運動 (11)、跳び箱 (11)、遊び (10) が示された。

(8) 養成校教員への相談内容

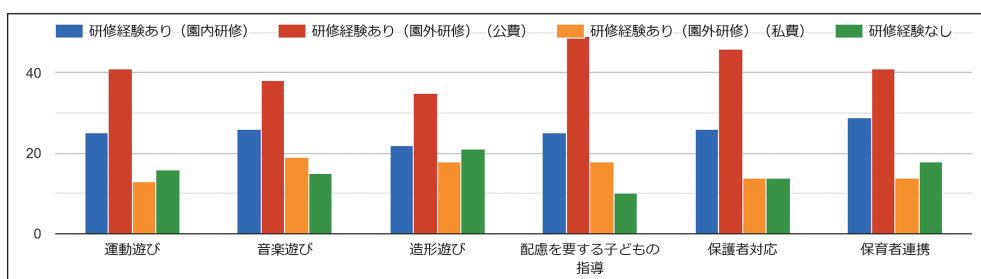
「養成校教員への相談内容」について、自由記述で回答を得た結果を同様に分析した。結果、

得られた抽出語 147 異なり語数 80、回数平均 1.84 回数、1 標準偏差 2.26 であった。出現回数の分布については、出現回数 3 回で約 90% であった。出現回数 14 回あった「運動」に関する記述内容は、「在籍教員への研修、運動機能向上と意欲向上にむけた実践」、「運動や集団遊びが苦手な子どもがやってみようと思えるような誘いかけ、取り組み」、「体幹を鍛える簡単な運動遊び」、「運動遊びについてどのようなものがあるのか、そのねらいを多く知らないと感じているので、学ばせていただきたい」、「子どもの発達に合った遊具の使い方、発達に即した運動遊びの種類や方法」であり、保育者の相談したい内容が示された。

5. 研究結果及び考察—研修に関すること

(1) 園内研修について 実施状況

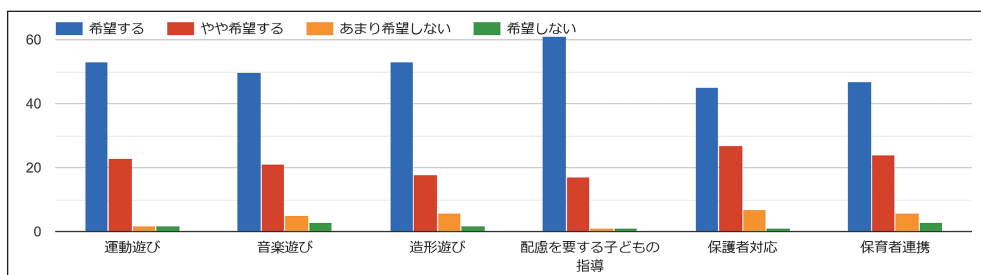
運動遊びについての研修経験は、園内で 25 人、園外では公費で 41 人、私費で 13 人と、多くの保育者が受講している状況が示された。その他、音楽遊び、造形遊び、配慮を要する子どもの指導、保護者対応、保育者連携の研修へも積極的に受講参加している状況が明らかになった。



図表 17 運動遊びを含む研修受講経験

(2) 実技研修について（受講状況と希望）

各研修への受講希望についても、図表 18 が示すように希望する、やや希望する値が高いことから、保育現場で働き出してから学び続ける姿勢、モチベーションを維持していくこと



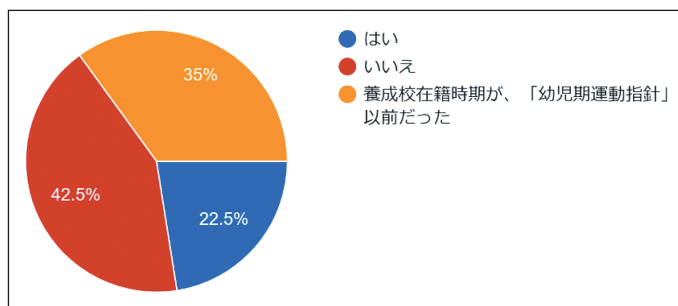
図表 18 運動遊びを含む研修受講希望

が保育者に必要なスキルといえるのではないだろうか。また一方では、保育士キャリアアップ研修の観点からみても、処遇改善等の対策だけではなく、保育職の専門性をさらに高めていく取り組みとしても今後益々重要なサポート支援が必要になると予想される。

(3) 幼児期運動指針について

2012年に作成された「幼児期運動指針」を養成校時代に学びましたか、という質問では、はい18人(22.5%)、いいえ34人(42.5%)、養成校在学時期が作成以前であった28人(35%)であった。

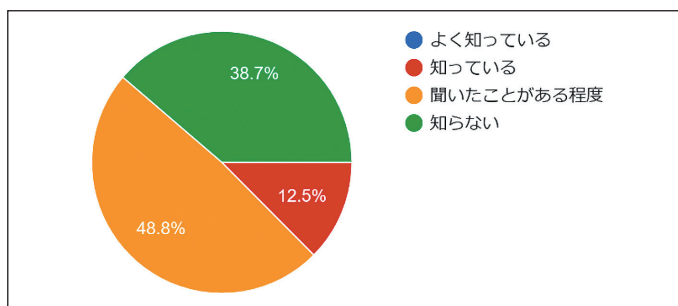
「幼児期運動指針」の活用状況については、よく活用している1人(1.8%)、活用している8人(10%)、あまり活用していない44人(55%)、全く活用していない27人(33.8%)と、活用状況が低い傾向であった。



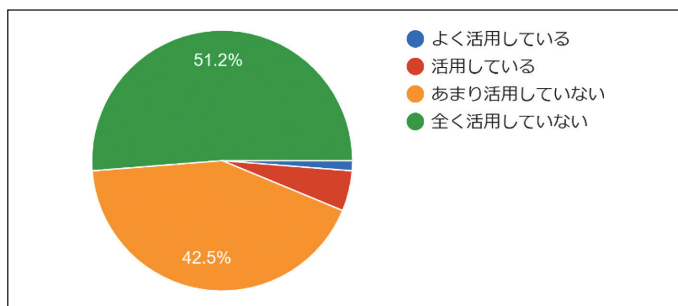
図表 19 幼児期運動指針の取り扱いについて

(4) 「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールについて

「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールについてご存じですか」の質問では、知っている10人(12.5%)、聞いたことがある程度39人(48.8%)、知らない31人(38.7%)であり、あまり認知されていない状況が窺える。



図表 20 「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールの認知度



図表 21 「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールの活用状況

「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケールの活用状況については、よく活用する 1 人 (1.3%)、活用している 4 人 (5%) と、活用している園は極めて少ない傾向であった。

(5) 養成校での学びについて

- i 養成校教育に関して、「運動遊び（幼児体育・体育・子どもの運動）」の科目で取り組んでほしい（取り組みたかった）内容について下記に示す。

・いろいろな道具を使って簡単にできる運動 ・パラバルーンなどの運動会に活用できるもの ・乳児向けの運動あそび（複数回答） ・段ボールなどの身近なものを使った運動遊び ・リズム運動やリトミック・年齢に応じた遊びの展開（跳び箱、鉄棒、竹馬など） ・鬼ごっこなど、いろんなバリエーションや道具がなくても運動遊びができる内容 ・巧技台を使った遊び・サーキット遊びの作り方のような実技メインの運動 ・子どもと一緒に遊ぶ楽しさ・体幹や筋力を鍛える遊び ・保育者自身が運動遊びは楽しいと感じていろいろな遊びを経験してほしい ・室内でも体をつかって遊べる取り組み ・運動会の年齢に応じたダンスや演技の構成方法、演じ方、見映えのする演技方法

図表 22 養成校時代「運動遊び（幼児体育・体育・子どもの運動）」の科目で取り組んでほしい（取り組みたかった）内容について

- ii 養成校教育に関して、「健康領域」の科目で取り組んでほしい（取り組みたかった）内容について下記に示す。

・幼児の運動発達について（複数回答） ・できることを目指すばかりではなくて、楽しいを主にした内容 ・各種集団遊びを行い、コミュニケーションや作戦を練ったり、運動遊びを通して学ぶこと ・運動遊びの中での内面（精神）の発達と成長について ・安全面、事故、けが防止（複数回答） ・からだの正しい動かし方 ・自分のからだの守り方 ・入園までに身につけておく生活習慣 ・生活リズムや食事 ・具体的な避難方法、避難訓練の仕方 ・子どもが健康という事について興味をもてる内容（複数回答） ・幼児期に具体的に必要とする運動量を示す内容 ・普段行う動きがいかに大切か伝えてほしい（階段の登り降り、足や膝の使い方など）（複数回答）

- ・運動がどのような力になっているのか具体的に知りたい ・運動と健康がどのように関係しているのか
- ・雨天時の戶外活動の活かし方
- ・領域健康が人間関係や環境の育ちにもつながっていることが多く、その重要であるという認識が不足していた

図表 23 養成校時代の「健康領域」の科目で取り組んでほしい（取り組みなかった）内容について

iii 養成校時代に課外活動として「運動遊び」に関連する取り組みについて下記に示す。

- ・キャンプレクリエーションカウンセラー ・スイミング指導（多数回答） ・体操教室（多数回答）
- ・パラバレーン講習 ・小学生ソフトボール、野球教室 ・ダンス（多数回答）

図表 24 養成校時代に課外活動として「運動遊び」に関連する取り組みについて

6. インタビュー調査について

インタビュー調査は、本研究で実施したアンケート調査回答者の中から4名を対象に、2022年10月～2023年3月に、対面形式もしくはオンライン形式により、半構造化面談で実施した。

対象者は、私立保育園主任：(A)、公立保育所職員：(B)、私立保育園園長：(C)、私立保育園副園長：(D)であった。質問項目別に回答内容を図表25にまとめた。文中の下線部は筆者が追記したものである。

・保育現場での「運動遊び」の取り組みについて
(A)運動会は親子あそびに変更して、発表会という形式で行っている。運動というよりは、 <u>遊びの延長で体を動かすことを大事にしている</u> 。親子あそびで、例えば4歳児クラスは着せ替えごっこでファッションショーのようなかたちで実施している。3歳児クラスはわらわらあそびで紙ひこうきを作ってとぼすあそびを実施している。運動という点で大事にしていることは山あそびである。 <u>山でおもちゃ箱から体を動かす、自然の力をかりながら体と心の力を育んでいる</u> 。(B)勤務する保育所では、積極的に取り組んでいる。月1回、専門の先生にきてもらい運動指導を行っている。異年齢組担任であり、毎日からだを動かす取り組みは積極的に取り入れている。3、4歳児の午睡の際に、5歳児はルールのある遊びや、ドッチボールなどの集団の遊びを園庭やホールなどで実施している。(C)毎朝、体育ローテーション、園庭でサーキット形式(跳び箱、マット、平均台、朝礼台、移動式鉄棒等)で20分ほどの時間を取り組んでいる。年少組は、室内ホールで同様な活動を実施。音楽を流し、要所要所に補助に入りながら、また、子ども達が自分で取り組めるようにしている。 <u>2週間間隔で運動種目の見直しをし、難易度を上げたり、新しい種目を取り入れている</u> 。基本的に体育ローテーションの目的は、 <u>身体を動かす機会の確保、普段あまり取り組んでいないような簡単な動き(飛んだり跳んだり、ぶら下がったり、よじ登る、跳び降りる等)を多く取り入れている</u> 。投げるという動作も少ないので、敢えて投げる動きの場面を作っている。子どもたちがもともと持っている、動きたいという欲求、エネルギーを発散させようと考えている。(D)週1回 外部のイントラクター、専門指導者の運動指導 3歳:30分、4.5歳:45分。朝の10時から12時に実施。屋上園庭もしくは、ホールでの指導。年間計画に基づき、4、5月は、基礎体力の向上。そのあとは、9月フェスティバルに向けての種目別練習(マット・跳び箱・鉄棒・平均台等)。運動会では、曲にあわせて移動したり、過去は、組体操に取り組んだが、今は、マスメーゲーム的な内容。冬場は、なわとび、サッカーに取り組んでいる。 <u>サッカーでは、他園との交流試合なども企画</u> 。
「使用用具」に関すること よく使うもの 使用方法
(A)竹馬、三角馬、竹ぼっくり、なわとびは保有しているが、子どもたちが自由に取り出して遊びを展開している。(B)巧技台、鉄棒、平均台など。ホールや園庭でサーキット遊びなどを実施している。のぼり棒に綱を結び、そこをバランスをとりながら綱渡りを行っている。ケガや事故の危険はあるが、保育者が補助にはいり安全性を確保して実施している。(C)総合遊具があり、ネット登ったり、滑り台がある。特色ある遊具としては、2階まで上がれるネットの遊具がある。下は2本の棒がありネットへとつながる。年少の子どもでは難しく、手足の運びの難しいところもあり、あえて難易度を上げており、ロープを上に入りながら体を上手く使って、動きを引き出す仕掛けがある。年長の子どもが取り組む姿が小さな子どもの憧れの姿になればいいと考えている。竹馬も置いてあり、子どもたちなりに遊んでいる。昔遊び(竹トンボやけん玉など)も取り入れながら、いろいろな動きを体験してくれたらいいなと思い、園庭に設置している。(D)マット、跳び箱、平均台を使用。安田式遊具。子どもたちが自分の能力より少し上の力を使うような遊具で、階段がなく、はしごも間隔が広く、子どもたちが見ながら、考えながら遊べるような遊具で、怪我に注意しながら、機敏性を養っています。自由遊びの中で複合的な遊具として活用。色々な体の部位を使って遊べるようになっていく。
「運動あそび」で、工夫していること
(A)山遊びでは日によってテーマを決めている。例えば、今日とはどこん歩くと、ときめたらとこん歩くと。山だけの活動力で14000歩程度は歩いている。その他、冒険の日などもある。(B)グループ対抗戦で集団での達成感を味わう(個人での達成感も大切であるが、集団で達成する喜びを感じてほしい)。(C)クラスみんなで取り組む中で、みんなで応援したり、みんなで運動を楽しめることを工夫している。(D)集中力が続かないこともあるので、クラス全体で指導する時には、その子どもの力に応じた内容をかんがえ、グループごとに分けて取り組んでいる。能力差については、例えば鉄棒を触ったことのないような子どももいれば、家庭での遊びの経験により差がある。運動会等においては、子どもの能力に応じてという点では、例えば跳び箱でも、何種類かの段を用意し子どもに選べるようにしている。鉄棒についても、発表する種目を選べるようにしている。挑戦する姿を覚えてもらうようにしている。

幼保小連携から考える「運動遊び」の教授内容・方法に関する研究

「運動あそび」で、苦慮していること
(A)山あそびを展開する上で、個人の能力差があるので、どの子のレベルに合わせて活動するのが難しい。しかし子どもは助け合うことを通じて不思議と一丸になれるので、自然の中で集団で活動すること、そして自然の力は大きいと思う。(B)集団が苦手な子は入りたがらないので個別対応しているが、どのようにしたら集団へ入ってけるのか。(C)保育における永遠のテーマだと思うのですが、集団と個の関係性。主体性、がんばる姿勢を集団の中でどうフォローしていくか。(D)支援児もいるので、達成感が感じられるよう、仲間たちの支え、みんな一緒にだよという気持ちが持てるようにしているところが難しい。
「運動あそび」に関する学びの希望
(A)からだのしなやかさや俊敏性など、どのような動きやあそびで身につけているのかを具体的に知り、保育できればと希望する。(B)異年齢でも遊べる運動あそび。乳幼児の運動あそび。(C)先生たちも運動遊びを体験してほしいと思う。先生たちが、自分でやってみて、何が難しいかといったことを子どもに伝えられと思うので、実体験を大切にしてほしい。
「運動あそび」に関する学び 養成校段階で学んでおきたいこと
(A)何を学んだか覚えていないが、子どもの心理、発達心理学のような講義をしっかり受講していけばよかったと思う。(B)遊びのレパートリーや導入方法など。運動あそびの具体的な指導方法。声かけの質やタイミングなど。(C)色々な遊びや運動の実験を積んでほしい。現場の先生との考え方の差がある。現場の先生にとっては、安全第一で、消極的な思考である。そのため、運動遊びの場面でもちよつと危ないとなると極力しないという考え方になる。環境として、多少リスクがあったとしても、子どもたちが、挑戦したいという気持ちや、出来た時の達成感とかを感じられると思うのですが、そのあたりの運動遊びのあり方について、教えてほしい。小さな怪我をして、大きな怪我を防ぐといったことを学んでほしい。(D)特にこれをして欲しいことはない。先生たちも身体を動かすことが好きであってほしいと思う。指導の仕方は、園に入ってから先輩や専門指導者から正しい補助の仕方を学んでもらえればいいです。運動が苦手な先生は、子どもの運動遊びを見守っているだけという感じで、一緒に遊びこんでしまえば、安全管理が難しいこともあるけれども。
「運動あそび」に関する相談 養成校教員への相談
(A)保幼小の連携は言われているが、保幼養成校の連携は少ないのではないかと。例えば、実習生を受け入れる際、養成校の先生と実習生に関して情報交換などを行い、弱い部分などを伸ばせる実習にすることで、実習の意味合いが変わってくると思う。学生をもっと育てることができると思う。(B)「きびしさ」と「楽しさ」のバランス(例 ふざけている子どもへの対応、集団でのモチベーション、雰囲気づくりなど)。(D)機会があれば、お話しできればいい。
「幼児期運動指針」に関する学びと実践
(A)10の姿を年に一回程度研修などで再確認したいと思うが、なかなか実施できない。(B)保育所保育指針については、専門の講師が来たときに学ぶ機会がある。(C)園内研修では、特別「幼児期運動指針」を取り上げることはないが、運動遊びの意義についての研修はある。幼児期運動指針の理念、いろいろな動きが必要であるといったことを押さえている。(D)園内研修では、どのような運動指導するか、幼児期運動指針の考え方を取り入れながら、計画している。週1回の指導後の振り返りを外部講師との連携を大切にして取り組んでいる。

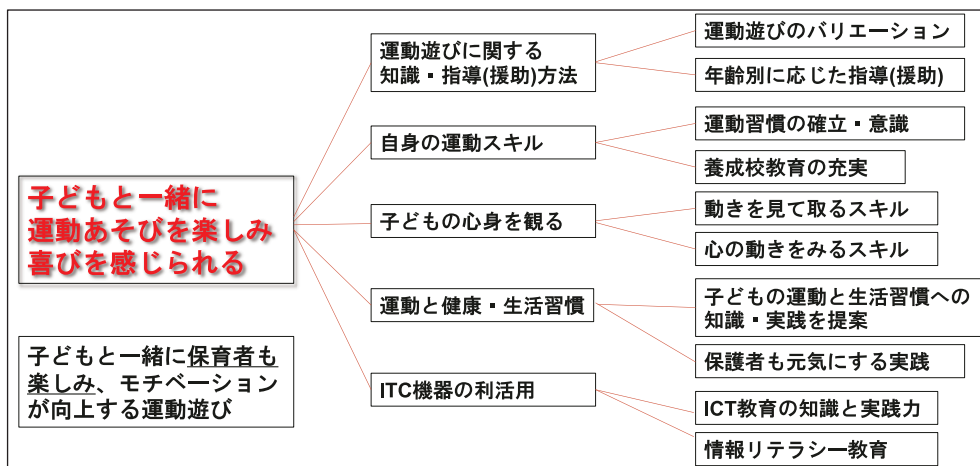
図表 25 保育現場へのインタビュー調査

7. 本研究のまとめ

本研究では、保育現場における運動遊びの実施状況や内容、そして課題や問題点などの結果及び考察を行った。その中で最も重要な点は、「子どもと一緒に運動あそびを楽しみ、喜びを感じられる」ことが、時代が変わっても保育者に求められるマインドであると考えられる。そのために必要になってくる要素として次の5つのスキルを提示する(図表 26 参照)。

一つ目の「運動遊びに関する知識・指導(援助)方法」を習得するには、運動遊びのバリエーションを広げることと、保育者自身(学生自身)が習得した遊びを年齢に応じて、或いは状況に応じて提案し実践できるスキルを養うことが必要である。幼少の頃に遊びの経験が少ない学生、或いは体を動かすことが苦手な学生など、さまざまな問題が報告されている。遊びの経験がないのならば、養成校在学時に関連する授業やボランティア活動などを通じて経験することもできる。また、遊びに関するさまざまな情報は現代社会の中では欲しいタイミングで得ることができる。その情報から得た知識とリアルな実践の両方をもって自らの経験知として蓄積していくこともできるのである。

二つ目の「自身の運動スキル」については、自分自身のための運動実践をライフスタイルのなかに確立していくことが重要であるといえる。近年、スポーツの考え方自体が拡大、拡張し



図表 26 研究2 「保育現場・教育現場を対象とした実態調査」のまとめ

ている。例えば稲垣⁵⁾の「ヴィジヨナリー・スポーツ」という考え方では「ウォッチング系」や「ツーリング系」、そして「座禅」や「ヨガ」などの瞑想系までスポーツに入ってくる。筆者（中村）が日々実践している愛犬との散歩もスポーツといえる時代になってくる。それはともかく、体を動かすだけでなく、心が楽しむ、安らぐこともスポーツであると考えられることができる時代になってきた。そもそのスポーツの語源は「気晴らし」という意味あいがあり、体と心を動かす時間をライフスタイルに積極的に取り入れて活動することが、他者のかかわり、特に子どものかかわりに関して有意義なスキルとして働くものと思われる。

三つ目の「子どもの心身を観る」スキルを養うためには、乳幼児の発達段階に応じた運動機能に関する知識と、実際にかかわる子どもの運動の水準を見極めることが大切である。そのためには、養成校での乳幼児の発育発達に関する授業の知識と合わせて、多くの運動実践の場で「動きをみる」経験が大事になってくる。同時に、精神（こころ）の発達への視点も重要である。「心は体の後ろに隠れているのではなく、体と一緒にいつも現れている」⁶⁾という考えで子どもとかかわっていくことで、更に子どもの運動の質が向上すると思われる。

四つ目の「運動と健康・生活習慣」については、子どもの生活習慣で大切なことは、昔も今も「よく食べ・よく寝て（休む）・よく遊ぶ（運動）」であるといわれている。この3本柱がしっかりとしていれば規則正しい生活習慣は確立できるのである。しかし、最近の子どもの健康に関する報告などからは、この3本柱のバランスが崩れているというものが少なくはない。そのような子どもの生活習慣を改善するには、本研究調査がターゲットにした「運動（遊び）」から整えていくという視点が大事になってくる。園や家庭において、子どもの活動量を向上することが、「よく食べ」、「よく寝る」ことに繋がってくる。活動量をアップできるような「運

動遊び」の実践で、子どもの心と体へアプローチできる保育者が求められているといえる。また、子どもの元気の源でもある保護者への働きかけも重要な視点である。子どもの元気な姿を考えるには、保護者や保育者の元気な姿が大前提であることをしっかりと押えておくことが重要である。

五つ目の「ICT 機器の利活用」については、なかなか保育現場に浸透していない現状がある。幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、園生活では得難い体験を補完するための、情報機器（ICT）の活用方法について学ぶことが、保育の質につながる一助となる。ICT 教育の知識と活用方法については、保育現場と養成校が連携を図り取り組むべき今後の大きな課題であるといえるのではないだろうか。

【参考引用文献】

- 1) スポーツ庁 (2016) 「平成 27 年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について」 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1368152.htm 閲覧日 2023.2.15.
- 2) 前橋明他 (2009) 『幼児体育 (専門)』. 大学教育出版.
- 3) 三村寛一・安倍恵子編他 (2018) 『新・保育と健康』. 嵯峨野書院.
- 4) 蛭原正貴 (2021) 「伝承遊びが保育者効力感に与える影響」. 幼児体育学研究第 12 巻第 2 号, pp.15-23.
- 5) 稲垣正浩 (2004) 『身体論－スポーツ学的アプローチ』. 叢文社.
- 6) 田中彰吾 (2017) 『生きられた〈私〉をもとめて－身体・意識・他者－』. 北大路書房.